

[ダンスとの出会い]

ヨゼフ・ピラーテス、通称ジョーに一目惚れをしてからちょうど2か月半後、もうひとつ運命的な出会いをしてしまった。今度は、生き生きとしたカッコイイ若い男性。それもなんと19歳！ 私の「ダンスへの憧れ」を聞いた中学時代の友人が、自分が通っている教室にとってもいい先生がいる、と連れて行ってくれたのだ。

私のダンスへの憧れは少女時代、1967年公開のソ連映画「戦争と平和」で始まる。

大広間で、美しいヒロインが、純白のドレスで婚約者(だったと思うが)の腕に抱かれて、舞う、舞う、舞う。爪先が床に触れていないのでは、と思わせる軽さでワルツを踊る。あの速さは、おそらくウィンナワルツだったろう。ドレスの裾が、蝶のように、舞う。

そして年月を経て、ドイツの歌劇場でのオペレッタの稽古場。オペレッタは、親しみやすい庶民的オペラ、日本語では「喜歌劇」とも訳される。セリフや踊りの場面も多く、コミカルな要素が強い。

例えば、オッフエンバッハ作曲の「天国と地獄」の中の1曲。日本人ならきっとすぐに、某CMや「昔の運動会」を思い出すくらい、なじみのあるメロディだろう。実際のシーンは、パリの「マキシム」のカンカンガールズが、スカートをたくし上げて、所狭しとキャーキャー踊りまわるラインダンスだ。

そして、オペレッタにはワルツを踊るシーンもよく出てくる。

「伯爵夫人マリツァ」という、聴衆にとっても愛されている作品の中で、オニイサン役のテノールとワルツを踊ることになった。私はステップを習ったこともない。稽古場の演出家は、「はい、そこから16小節ワルツを踊ってここまで来て」としか言わない。

どうなったかって…。私のオニイサンは、何気なく私の手を取ってそのまま、三拍子のゆっくりとしたワルツステップを踏み出した。そして私は…。なんと“普通”についていくことができたのだ。秘かに感激した！ 私でも踊れた！ この作品はドイツ語圏ではとてもポピュラーなものだったので、2シーズンにわたって30回以上舞台にかかり、私も30回以上「16小節のワルツ」を踊った。そしてだんだんと、本当にちゃんと習いたくなかった。頭の中には、あの「戦争と平和」の大広間のシーン。

ところでウィーンではいまだに、シーズンになると、舞踏会が至るところで開かれる。その主催者も様々だ。パン屋さん、弁護士会、狩人の会、歯医者

協会、ウィーンフィルなどなどだけれど、一番有名なのは「オペラ座の舞踏会」だろう。一晩中続くし、ヨーロッパのセレブたちも招かれたりして、TV 中継もある。ここでの「社交界デビュー・セレモニー」に選ばれるために、ダンス教室に通う若者たちが。今でも多くいる。

「舞踏会シーズン」は日本では聞きなれない言葉だが、大雑把に言うと、キリスト教のカレンダーと関係がある。「灰色の水曜日」とか「断食の期間」などは耳にしたことがなくても、イースター、「復活祭」は聞いたことがあるだろう。キリスト教にとっては、最も大切なお祝いだ。その「復活祭」に向かう時期の一つが「謝肉祭」。いわゆるカーニバルで、“ドンチャン騒ぎ”の許される日々だ。その日々の中で催されるのが「舞踏会」。

現代では、本当に様々な種類のダンスが多くの人たちに愛されているけれど、昔ながらの「本物の舞踏会」が、今でも厳然と存在しているのは、どうも世界の中でウィーンだけらしい。

「会議は踊る、されど会議は進まず」というセリフが有名な、「会議は踊る」という昔の名映画を知っている人は、今でもいるだろうか。

ナポレオンの侵攻問題を話し合うため、ウィーンのメッテルニツヒ宰相の下に集まった、各国の貴族の人々を描いたものだが、その時代からずっと、オーストリアの人たちは踊ることが好きだったのだ。その伝統が今でも脈々と続いている。

日本の TV でも一時期流行った、プロとアマがペアになって競う「社交ダンス競技会」の番組は、オーストリアでは今でもずっと続いてやっている。

現在ではどうかかわからないが、以前は、ウィーンで「ある年齢になってダンス教室に行く」のは、昔の日本で、女子が当たり前のように、お茶やお花を習うような感覚だったらしい。ただこの場合のダンス教室は社交ダンスで、ペアで踊るわけだから、女子だけでなく男子も行く。「親から行かされる」子供たちも多かったと聞く。その理由とは？

社交ダンスはその名の通り、もともとは社会に出た時の「社交のため」にあった。そのために「社交の第一歩」を習うことから始まる。その「初めの一歩」は、“知らない相手”と挨拶をし腕を組んで、スモールトークをしながら、部屋を回って歩くことだった、と私の(元)夫が話してくれた。

立ち方や歩き方、美しいハンドキスの仕方、女性のエスコートの仕方、など、踊るまでに習わなければならないことがたくさんあったそうだ。本当は“好きなコと踊ること”だけが目的だった彼は、この「初めの一歩」が大嫌いでした。しょっちゅうサボってばかり。なので「ウィーン音楽家」にもかかわらず、

踊れない！

もっとも、「美しき青きドナウ」などのワルツや円舞曲を多数作曲し、ヴァイオリンを弾きながら指揮もした、「ワルツ王」として名高いかのヨハン・シュトラウスも、実は踊れなかったというのは、有名な話ではあるが。

2005年の4月。ダンス教室に連れていってもらって、憧れがすぐに現実になったか、と言うとももちろんそうは甘くない。

そこでの私の「初めの一步」は、ブルース。組んで動いた瞬間、「爽やかボーイ」からプロの踊り手のすごさを感じた。なぜかはわからない。もしかしたら、音楽に従事している人種の、本能的感覚だったのかもしれない。彼はまず、私の体がどのくらいリズムを感じ取れるかをみたのだろう。ステップはとても簡単。相手(この場合は先生)の足を踏むこともなかった。リードやタイミングをちゃんと感じるか、多分その「テスト」だったのだと思う。もちろん何も知らなかった私は、この「テスト」にドキドキしたが。

さてさて、そこから今までの私の道のりの話は長~くなるので、割愛しよう。19歳だった「爽やかボーイ」は、私の「予感」通りすばらしいダンサーとなり、すばらしいパートナーと、なんと5年連続で「10ダンス全日本チャンピオン」になった。アジア選手権にも優勝して、「君が代」を聴きながら日の丸の国旗を眺め、今でも世界の競技会では常にファイナリストに名前を連ねている。10ダンスとは、スタンダード5種目とラテン⑤種目、合わせて10種目のダンスをマスターしなければならない“過酷”な競技。何回か日本での競技会を見に行ったが、恐ろしいほどものすごい体力と集中力が必要とされる。でも先生が10ダンスのスペシャリストだったおかげで、私は思いもかけず、ラテンダンスも本格的に習うことができた。そしてこれは、歌い手としての、そして音楽家としての私にとって、言葉では表現できない「収穫」になった。日本のクラシック音楽家の皆さん！ ぜひぜひ社交ダンスを学んでみてください、と声を大にして言いたい。必ず「新しい世界」が見えてくるはずです。何よりも、リズムの取り方と感じ方の違いが、これほど自分の中で音楽の広がりを見せてくれるとは！ そして、常に相手と一緒に呼吸をし、相手を感じて動くことは、アンサンブルで音楽を一緒に奏でる喜びにも通じる。

また、いわゆる高齢者にとっても理想的な「運動」だ。ステップを習い、覚え、音楽を聴きながら体を動かす。頭と体の同時進行。(アノ…、こんなに一生懸命覚えたのに、まだ4小節分?!なんてボヤクこともしょっちゅうですが…。)そしていつも相手と一緒に動く。ほんの少しでもうまくできた時の達成感

と言ったら！ 本当になんて素敵な世界！ なんて楽しい「老化予防」！

体が動く限り、絶対にずっと続けていきたい、とすっかりダンスにはまってしまった私は、今は結構細かくマニアックな練習もする。ピラティスのせいもあるかもしれない。筋肉の使い方ひとつで、体のバランスや重心、動きがとても変わるのだもの。ピラティスで教わった、“培った”知識と感覚を役立てて、ダンスを習い、歌を歌う。

皆さ～ん、すばらしい「健康トライアングル」だと思いませんか？！